

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 西方寺の山辺の道を歩く

講師 山本 英之

(高松市文化財専門員)

平成25年4月21日(日)

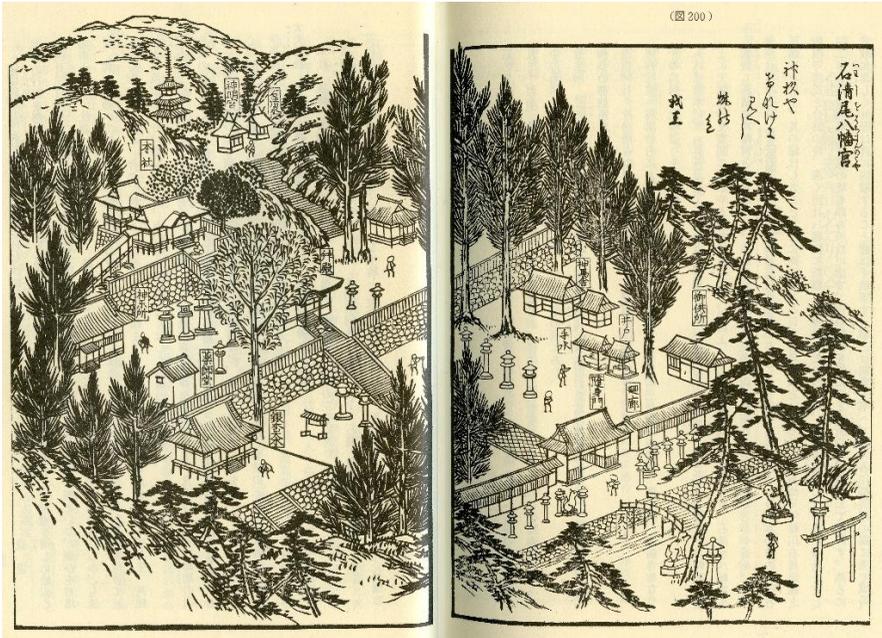
共催 高松市歴史民俗協会

高松市教育委員会

1 石清尾八幡宮

石清尾八幡宮は高松市街地の南西、石清尾山の麓に鎮座し、日常のウォーキングや恒例の市立祭、例大祭などを通じて市民に親しまれています。仲哀天皇、応神天皇、神宮皇后を祭神とし、その起源は平安時代の延喜十八年（九一八）に八幡大神が赤塔山（神社裏山）に現れた奇瑞に遡るとされ、一説には時の国司が京都の石清水八幡宮の御分霊を勧請したことに始まるとも伝えられています。赤塔山は石清尾山から東に伸びる尾根の先端にあたり、この尾根が亀命山（亀ノ尾山）と呼ばれたことから、「石清水」と「亀ノ尾」を合わせて「石清尾」となったということです。

南北朝時代に、讃岐ほか四国一円を領有した室町幕府管領細川右馬頭頼之をはじめ、生駒家や高松藩松平家の歴代藩主も石清尾八幡宮を篤く崇敬し、長年にわたって社殿の改築や社領の寄進が繰り返されてきました。生駒親正は高松城と城下町の建設に際して神社を城の鎮守社と定め、息子の一正は社領二十石八斗を寄進。代わって松平頼重が入封するとそれまで山頂にあった社殿を現在地に移して社屋を一新し、社領二〇二石を寄進しました。このとき、社殿を鶴岡八幡宮に模し、祭礼は石清水八幡宮に倣ったとされています。



《 図 1 『金毘羅参詣名所図会』 に描かれた石清水八幡宮境内》

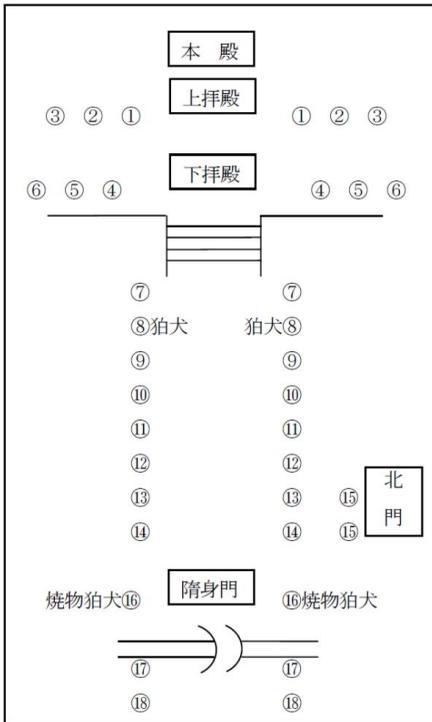
恒例五月三日の市立祭は、貞治三年（一三六四）四月三日の細川頼之による右馬頭祭が起源とされ、初期は甲冑をまとった騎馬武者が神前を疾走する勇壮なものでしたが、後に農具や植木の市となって現在に伝わっています。

江戸時代、旧暦の八月十五日に執り行われた例大祭は城下の氏神の祭礼として賑わい、町々がそれぞれに作り物や幔幕で飾った「船」と呼ばれる山車を引き出す壮観なものでした。現在は十月の第三土・日曜日を祭礼日に定めて地元有志の協力を得て賑わいを見せています。讃岐国名勝図会には大祭の行列の様子が記されています。

祭礼の次第

神輿の渡幸は八月十五日の午の上刻、本社より御旅所までの道、楽を奏して供奉のねり物繁満にして枚挙する事あたはずといえども、もつともその壯觀なるものをいはば、前払（十人ばかり）鰯船（本町より出だす鰯。猩猩緋緋、水葵御紋・かひふり。童子船ごとに数十人附）同（東浜より出だす。緋緞子、水葵御紋）同（魚屋町より出だす。猩猩緋、桐の紋）同（北浜より出だす。猩猩緋、巴の紋）同（湊町より出だす。同上笹りんど紋）同（杣場より出だす。緋板、蛇の目紋）川船（福田町よい出だす。はやし）練物金時に熊（古馬場町）鉾（鍛冶屋町）菊児童（通町）牧場（亀井町）神功皇后（片原町・兵庫町）海老（古新町・外磨屋町・紺屋町）西王母（桶屋町・今新町・大工町）鯉（塩屋町）鷲（瓦町新・東瓦町）鎮西八郎伏鬼（西浜町・木蔵町）駒牽（新片原町・築地町）鯛（藤塚町）獅子二頭（中新町・東瓦町・旅籠町）当家二組（幣持二人、挟箱四人、台笠・立笠四人、白熊四人、鳥毛四人、大鳥毛三人、長刀持一人、鉄砲八人、弓六人、刀筒四人、太刀持一人）乗輿（七、八歳の童子、赤字金襴装束、帯剣弓箭を負う。オシキラといふ）高荷馬（馬士大勢、催馬楽を諷ふ。五カ所より出だす）鉾二振（持人十二人）四神の旗 神馬 馬乗 御獅子二頭（胴緋縮めん、水葵の御紋）榊 猿

金毘羅参詣名勝図会によると、近世の社頭には本殿・幣殿・拝殿・神楽殿・神明宮などの多くの社殿や末社があったことが記されており、歴代藩主が寄進した石灯笼ほかの石造物も多数ありました（現在の献灯の配置を图示しました）。現在の本殿・幣殿・上拝殿の三社は、昭和六十一年の消失後に再建されたもので、下拝殿前の広場も、平成六年の改修工事で会談や石垣の修築とあわせて、東へ三メートルほど拡張したということです。



- ①延享二乙丑年八月十五日従四位下行侍
従兼讃岐守源朝臣頼恭
- ②宝暦十一年辛巳五月十五日従四位上行左近衛
権中将兼讃岐守源朝臣頼恭
- ③安永六年丁酉二月朔日従四位下行左近衛権少
将兼讃岐守源朝臣頼真
- ④享保二十年正月十五日従四位上行左近衛権
中将兼讃岐守源朝臣頼豊
- ⑤寛文八年戊申正月十五日左近衛少将源頼重
- ⑥天明四年甲辰三月十五日従四位下行左近衛権
中将兼讃岐守源朝臣頼起
- ⑦寛文九年己酉三月十二日左近衛少将源頼重
- ⑧安政五年戊午八月吉日藩中
- ⑨寛文十年庚戌正月十五日左近衛少将源頼重
- ⑩寛文十一年辛亥正月十五日左近衛少将源頼重
- ⑪寛文十三年癸丑年五月三日龍雲軒源英
- ⑫延宝三乙卯五月十五日龍雲軒源英
- ⑬天保二年辛卯八月朔日従四位下行左近衛権少
将兼讃岐守源朝臣頼恕
- ⑭嘉永六年癸丑正月十五日従四位下左近衛権中
将兼讃岐守源朝臣頼胤
- ⑮元治二年乙丑三月十五日奉献 八幡宮宝前
従四位上行左近衛権少将兼讃岐守源朝臣頼聡
- ⑯細工松嶋同高山 天明六年午八月 三良廣達
- ⑰天保十二歳丑十二月吉日
- ⑱天保八年丁酉三月建

《図3 石灯笼の配置と寄進者》

2 蜂穴神社

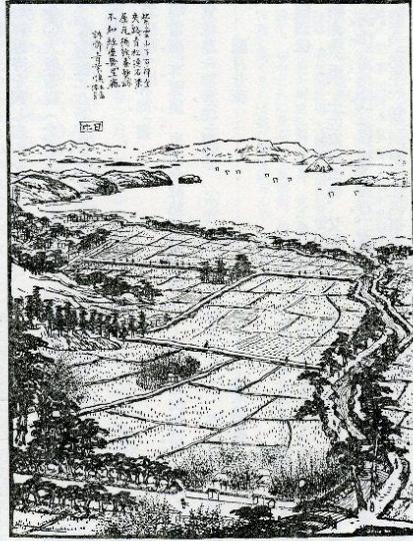
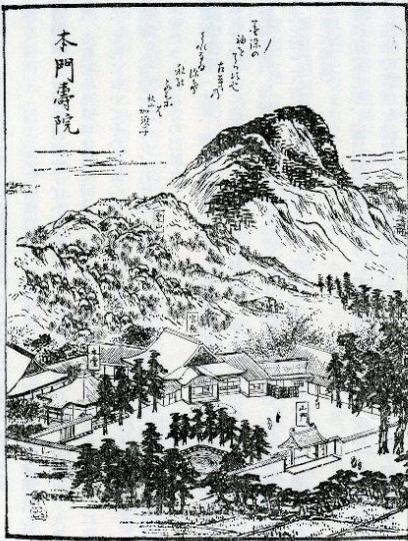
石清尾八幡宮から摺鉢谷川沿いに西へ向かうと、高德線の高架の手前から山伝いに蜂穴神社へ向かう参道が続いています。蜂穴神社は大山祇命を祭神とする神社で、貞治元年（一三六二）細川頼之が伊予の河野氏と合戦のおり、神夢の靈驗あつて勝利を収めることができたと伝わっています。一説には、祠の穴から数百匹もの蜂が飛び出し敵方の兵を襲ったことに因んで名づけられたとも言われ、九月四日に「蜂穴神社例祭」が催されます。

3 巖松山 本門寿院 克軍寺

天長九年（八三二）円珍（智証大師）の開基で本尊は薬師如来像。創建時の医王山延寿院金剛寺は天正年間（一五七三〜九二）長曾我部軍の戦火で消失しますが、寛永八年（一六三一）に生駒高俊の外祖父藤堂高虎の菩提のため再興し、医王山閑松院克軍寺と改称して寺領四十石が寄進されました。

慶安四年（一六五一）松平頼重は本堂その他を再建し、將軍家の尊牌を納めて蓮門院と改め寺領百石を寄進し、元禄十二年（一六九九）下野国輪王寺の末寺とし本門寿院の院室を賜りました。寛永二十一年（一六四三）には境内の山手に山王社を建てて

徳川家康を祀りますが、文化十二年（一八一五）八代藩主松平頼儀が當んだ屋島神社に移されました。境内に小堀遠州作と伝える亀鶴の庭があり切支丹灯籠が立っています。



本門寿院 紫雲山下の古禅堂／路を夾みて青松、石梁に通ず／屋瓦猶ほ余す秦饗の跡／知らず、幾星霜を經歷したるかを 納斎青葉嶺〈本藩備員〉 墨染の袖をてらすや古寺のくれなる深き秋の紅葉ば 秋山加須子

《図4 『讃岐国名勝図会』に描かれた本門寿院》

4 鉄砲場と高松グラウンド

K S B瀬戸内海放送局と、県道高松丸亀線（三十三号線）を隔てて向かい合う野球グラウンドがあります。さらに県道に沿ってグラウンドの西側に目を移すと、三棟の住宅団地が見られますが、この自治会掲示板には「鉄砲場住宅」の文字が。何か歴史的な由来がありそうな地名ですが、ここは江戸時代中頃から幕末にかけて藩の鉄砲演習場があった場所とされています。当時の高松藩には、馬術の訓練のための馬責場（淨願寺の西側。淨願寺は現在の高松市中央公園のあたり）、水練のための大的場、射撃演習のための鉄砲場があり、鉄砲場は「鉄砲場住宅」から現在の野球グラウンドにかけての広大な敷地を占めていました。文化年間（一八〇四〜一八）頃高松城下図では、本門寿院の西側に鉄砲場が描かれています。鉄砲場のさらに西側には、西方寺の万日ヶ原墓地が広がっていました。

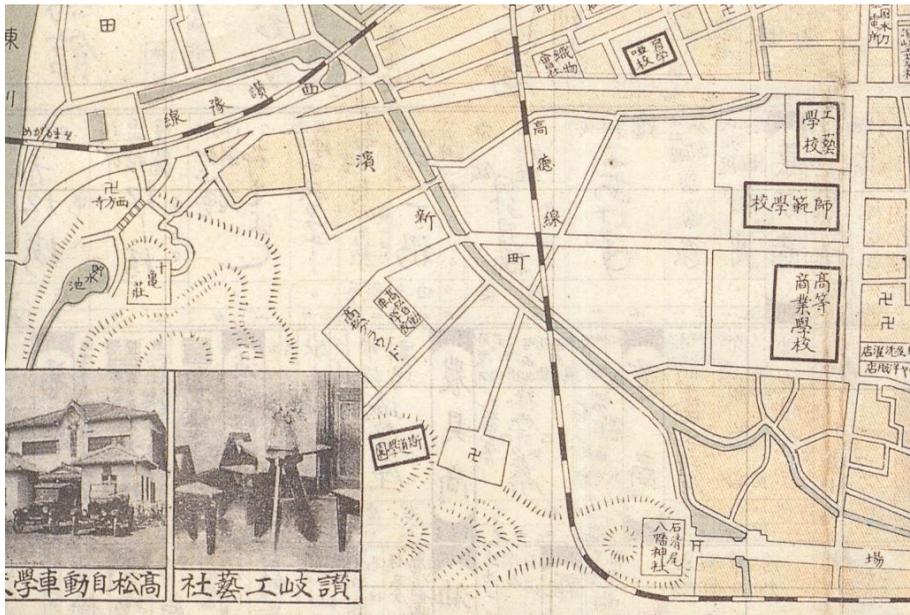
一方、鉄砲場の一角を占める野球グラウンドの起源は大正時代の末に遡ります。大正十四年（一九二五）夏の第十一次全国中等学校優勝野球大会で香川県立高松商業学校（現在の県立商業高校）は念願の全国制覇を遂げました。これを機に優勝記念となる事業として新グラウンド建設の声が上がり、翌大正十五年の七月に完成したのが高松グラウンドです。建設の発起や募金集めには高松野球同好会をはじめとする地元の

有志が奔走し、当時では珍しい株式会社組織による経営でした。当時の高松市民の野球に賭ける情熱を伺い知ることができます。

当時の高松商業学校の校舎は現在の中央病院の場所にありました。選手たちが毎日練習の行き返りに渡った高德線の踏切（昭和町駅の南側）には「野球踏切」の名称が残されています。



《図5 文化年間頃高松城下図に見られる本門寿院と鉄砲場》



《図6 昭和3年大日本職業別明細図に見られる高松グラウンド》

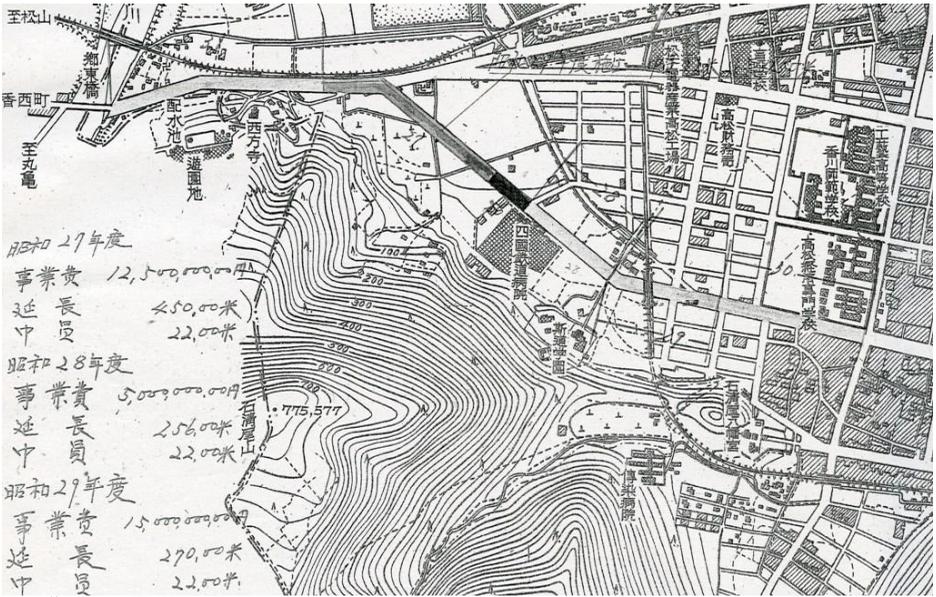


《図7 昭和25年頃の高松グラウンド跡
 当時は四国鉄道病院と国鉄四国総局の印刷場が建っていた。》

5 万日ヶ原墓地と戦後復興都市計画

西方寺山東麓の一带は、元は西方寺墓地・万日ヶ原墓地と呼ばれた広大な墓場で、高松城下の武士や町人の多くはこの地に埋葬されました。城下の兵庫町通を西へ進み、西浜を抜けて播鉢谷川にかかる高橋を渡った先が万日ヶ原墓地。橋のたもとには閻魔堂があり、古い俗謡にも「そうれんじゃ、ぼんぼりじゃ、高橋超えたらゆうれん（幽霊）じゃ」と歌われています。

昭和二十二年から市街中心部では戦災復興による区画整理事業が始まり、城下で広い面積を占めていた寺院の墓地は婆ヶ池墓地の隣接地や紫雲墓地、摺鉢谷墓地に移されました。続いて西方寺・万日ヶ原墓地も一部が国道十一号線（現在の県道高松丸亀線）の道路用地に含まれることとなり、八、三四一坪の墓域にあつた一万二千余基の墓石は、昭和二十九年以降数年をかけて順次峰山墓地へ改葬されました。讃岐国名勝図会には、万日ヶ原墓地に葬られた人物として駒井的庵（山崎闇齋門下の医者）、奥村無我（大石内蔵介良雄の剣術の師）、後藤芝山（講道館初代総裁）、後藤漆谷（書家・漢詩人）、梶原藍渠（讃岐国名勝図会の著者）が挙げられています。その他、小夫兵庫（幕末の高松藩家老。高松藩朝敵事件で切腹）、玉楮象谷（讃岐漆芸の創始者）とその一門、木村黙老（通明）なども万日ヶ原墓地から改葬されて現在も峰山墓地に眠っています。



《図8『高松復興市街図』の万日ヶ原墓地付近
現在の県道高松丸亀線と万日ヶ原墓地の位置関係が確認できる。》



《図9 昭和26年頃の万日ヶ原墓地
西方寺境内のふもとに広がる万日ヶ原墓地の風景》

6 西方寺

高松藩初代藩主松平頼重は、領内の主要な寺社に所領を寄進し、宗教政策を通して人心の収攬に努めました。そして寛文八年（一六六八）には、那珂郡にあった生福寺を香川郡百相郷の地に移して仏生山来迎院法然寺として再興し、松平家累代の菩提寺と定めました。さらに、延宝元年（一六七三）には西浜に西方寺を建立しました。これは、城下の塩屋町で念仏修行の草庵を結んでいた沙門蓮青に道場を与えて大回向（万日）の修行を命じたことに始まるものです。一万日目の満願の日には、城下から藩の重臣や多くの町人が参列して供養をしたといわれています。

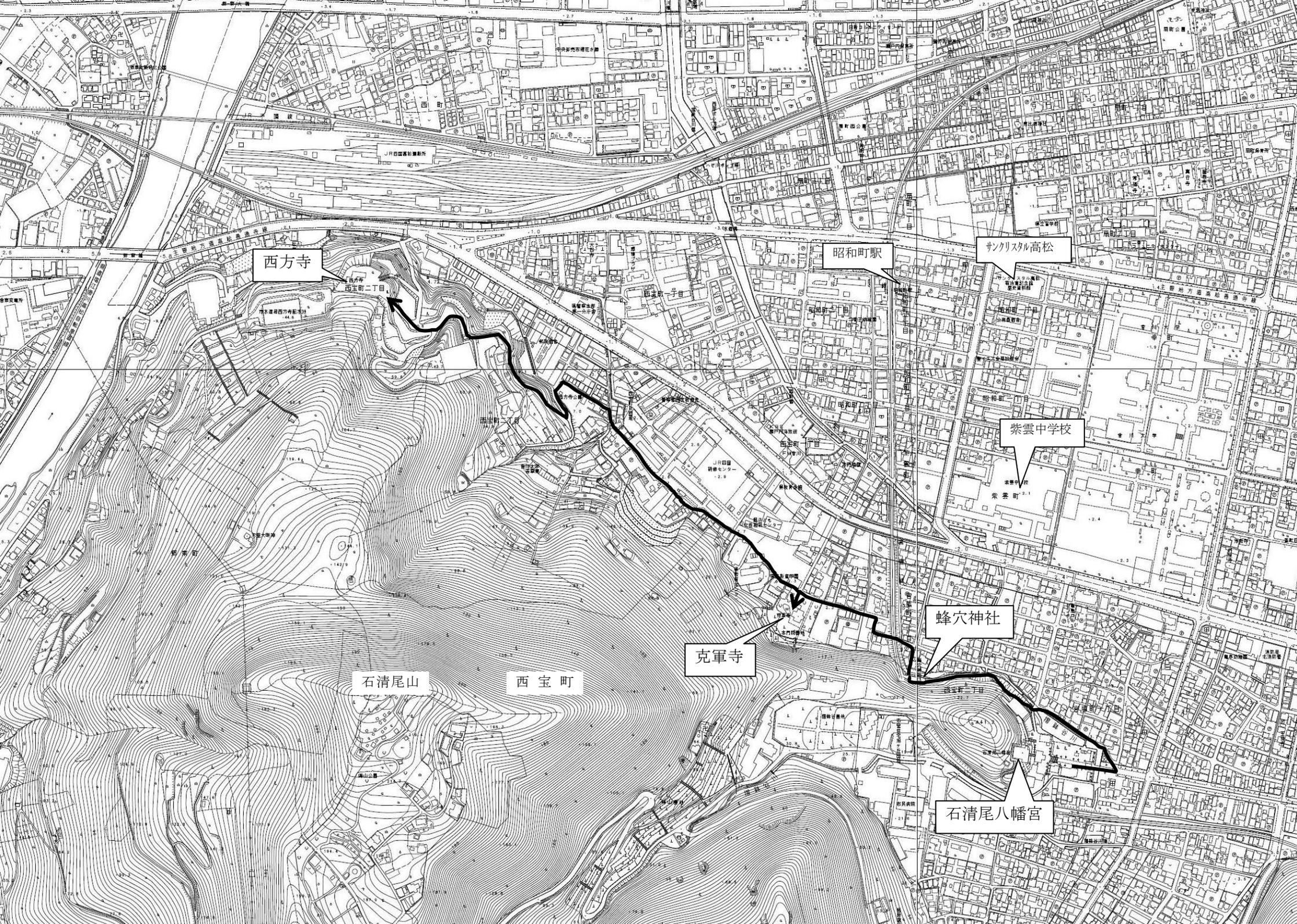
その後、道場の周辺には藩士や城下町人の墓地が形成されますが、文政十一年（一八二八）年に現在の西方寺山中腹に移されて念仏山専称院西方寺となると、道場周辺の墓地は万日または万日ヶ原と呼ばれるようになりました。

西方寺には、本尊の阿弥陀如来像や二十五菩薩とともに白鳳期の金銅釈迦誕生仏が伝えられています。お身丈は一〇・二センチメートル、蠟型による一铸造です。右手は天を、左手は体側に沿わせて地を指し、口元や目に微笑をたたえた温和で愛らしい表情に作られています。裳裾は背後を長く垂らし、正面では左右に捌いて脛と足先をのぞかせています。右の腰元で大きくたくし上げた裳腰や複雑な襷模様と

合わせて特徴的な表現の仏様です。

参考文献

- 『角川日本地名大辞典三七 香川県』 角川書店 一九八五年
- 『金毘羅参詣名所図会 復刻版』 晁鐘成原著 歴史図書社 一九八〇年
- 『讃岐国名勝図会 卷之五香川郡東上』・『讃岐国名勝図会 卷之六上香川郡東中』
日本名所風俗図会十四 四国の巻所収 角川書店 一九八一年
- 『香川県大百科事典』 四国新聞社 一九八四年
- 『香川県立高松商業高等学校野球史』 香川県立高松商業高等学校 一九八二年
- 『新修高松市史』 高松市 一九六四〜六九年
- 『瀬戸内の金銅仏 韓国・日本』 武田和昭著 美巧社 一九八七年



西方寺

昭和田駅

サクリスル高松

紫雲中学校

蜂穴神社

石清尾八幡宮

克軍寺

石清尾山

西宝町

4月21日(日) 西宝町からの復路

◆ことでんバス

(西方寺下)	(瓦町天満屋)	(高松駅)
12:16 発 →	停車しません →	12:34 着
12:26 発 →	12:38 着	
13:11 発 →	停車しません →	13:29 着

◆JR高徳線

(昭和町)	(高松駅)
12:40 発 →	12:43 着

次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 城跡めぐり①～丸亀城～

とき 平成25年5月26日(日)

9:30～12:00頃

集合場所 丸亀城 大手門

講師 東 信男(丸亀市教育委員会職員)

☆広報「たかまつ」5月15日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課(TEL 839-2660「午前7時30分～開始時間まで」)でお知らせします。(電話が通じない場合は、「実施」です。)



★次回の交通案内★

JR予讃線

(高松駅)	(丸亀駅)
-------	-------

8:15 発 →	8:57 着
----------	--------

「ふるさと探訪」に
参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を
一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけ
ましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。